

聖書箇所：ルカの福音書7章11～17節

説教題：「泣かなくてもよい」

1 「泣かなくてもよい」

今日の箇所には、ひとり息子を亡くして涙を流しながら悲しむ母親が登場します。私たちも、愛する家族を失って悲しむ友人や知人のそばに寄り添わなければならないことがあります。そんなときどんなことばをかけたらよいのか、慰めることばも思い浮かばず、もどかしい思いをいたします。

イエスはどうかされたのでしょうか。息子を失いやもめとなってしまった母親に「泣かなくてもよい」とはっきりと言われました。もし私がイエスの立場であるなら、こんなことばはとても言えません。この母親は、「めそめそするんじゃない」とか「みつともないからやめなさい」と、責められているように受けとめてしまうのではないか。そんな心配をしてしまうからです。

イエスはもちろん、そのような意味で言われたわけではありません。では、どのような意味で言われたのか。ともに考えて参ります。

2 町の門

(1) 町の外から内へ

まず最初に、この出来事がどこで起こったことであつたのか、場所について触れておきたいと思います。12節に「イエスが町の門に近づかれると」とあります。当時、町の周囲には城壁が築かれており、町を出入りするためには必ず門をくぐらなければならない、そんな構造になっておりました。イエスはナインと呼ばれる町の中に入るために、町の門

に近づいて行かれます。それだけ見れば、何も特別なことはないように思われます。でも、聖書には意味のないことばは一つもありません。ルカがこれが町の門のところで起きた出来事ですと書いたのであるなら、そこには深い理由があると考えべきでしょう。

町の門をくぐり中へ入ろうとしたところで、イエスはこの母親と出会うことになりました。もちろんだたの偶然ではありません。この場所、このとき、このタイミングで、イエスは母親に出会われます。イエスは町の外からやってこられ、町の中へ入ろうとされています。

(2) 町の内から外へ

一方、それとは反対に町の門をくぐって町の中から外に向かう人たちがいました。言うまでもありません。やもめとなった母親。そして死んだばかりのひとり息子が納められた棺（ひつぎ）、それを担ぐ人たち、そして大ぜいの町の人たちが付き添っています。どこに向かっているのか。町の外に置かれたお墓です。

町の人たちが大ぜいつき添っていたことから、この母親と息子がどれだけ近所の人たちから慕われていたのかがわかります。近所の人たちもまるで自分の家族が亡くなったかのようにして、悲しみをともにしています。

生きている間は町の中で人々といっしょに暮らすことができます。しかし、死んだ者は町の中から運び出され、墓に葬られること

になります。死んだ若者の亡骸は、町の中から町の外へと担ぎ出されようとしています。

このようにして見ると、町の門は、人の出入りするところというだけではなく別の意味をもっていることに気がつきます。町の中は健康な者が幸せに暮らす世界。でも門から外の世界は死者の世界。不幸と悲しみしかない世界。私たちにはどうすることもできない場所。ちょうどその境目にあるのが町の門です。

イエスはいま、そこに立っておられます。

3 やもめとなった母親

この母親は、夫を病気が何かで亡くして、女手一つでひとり息子を育ててきたのだろうと思われまゝ。苦勞して育てた息子もりっばな若者となり、さあこれからお嫁さんをもらい、やっと自分も肩の荷を降ろして幸せな生活を送れかもしれない。そんなささやかな夢を持ち始めたとき、その頼りにしていた息子が亡くなります。なぜ亡くなったのかは説明はありません。不慮の事故であったかもしれませんが。あるいは病気であったのかもしれませんが。

ある方は思うでしょう。キリスト教の神は愛の神だと言うけれど、どこに愛があるのか。本当に愛があるというのなら、なぜこの母親のひとり息子が死ななければならぬのか。そんな怒りを抱く方がおられても、私は当然だと思えます。

この母親のことだけではありません。三月に起きた震災と津波で多くの方が亡くなりました。神はいないかのように見えます。神がいたとしても、その神は私たちには無関心であり、冷たくこの世界のことを見下ろし、私たちの不幸を楽しんでいる、そんな神にし

か思えません。

神は本当におられるのだろうか。仮にもし神がおられたとして、その神は私たちが住んでいるこの世界には何の関心も払わない、そんな方ではないか。そんな疑問を多くの方が抱いているように思います。

4 主

(1) かわいそうに思った

次にそのことを考えて参ります。13節をお読みします。「主はその母親を見てかわいそうに思い、「泣かなくてもよい」と言われた。」

注意して読むと、この文章は、このようなことをしたのは「主」であったという書き方になっています。「主とはこのような方だ」と私たちに伝えるためです。主は「かわいそうに思った。」

「かわいそうに思う。」私たちもこのことばをしばしば使います。私は、心の中でこのことばをつぶやいています。新聞やテレビで悲しいニュースを読んだり見たりすると、口には出さないけれど「かわいそうに」と心の中で言います。しかし、別の記事に目を移し、頭が切り替わったとたん、そんな思いはすぐに忘れてしまいます。ときどき、かわいそうに思っている時間がもう少し長いこともあります。それでもせいぜい数日経てば忘れてしまいます。このような程度ですから、「かわいそうに思う」ということばには、どこか軽さ、安っぽさがつきまといまゝ。

今度は反対に、自分が「かわいそうに」と言われる立場になったらどうなるか。これもまた別の問題があります。

たとえば、「あなたはかわいそうな方ですね」と言われたとしましょう。皆さんはどう

感じますか。なかには怒り出す方もいます。「そんな中途半端な同情はいりません。」

こんなふうに見ただけでも、「かわいそうに思う」ということばはかなり複雑な事情をかかえたことばだとわかります。

主は、このことばをどんな意味で使われたのでしょうか。そのことを考えるために、ルカの福音書 15 章の放蕩息子のたとえ話を見えます。息子が父親のところに戻ってくる場面に、同じことばが出て来ます。15 章 20 節を読みます。「こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。」

ぼろぼろの姿で帰ってきた息子を迎えるために、父親が自ら家を飛び出し、前につんのめりそうになりながら走り寄り、息子を抱く。これら一連の行動は、すべて父親が息子を見てかわいそうに思ったというが動機になっています。

父親の威厳を尊ぶ習慣の強い日本の文化でもそうですが、イスラエルの文化でも、父親がこんなことをすることは絶対にないのだそうです。つまり「かわいそうに思う」という表現は、当時の人たちでさえあり得ないと感じるほどの、衝撃的で強い感情であることがおわかりになると思います。

そのことを裏付ける別の研究もあります。「かわいそうに思う」と訳されているギリシャ語は、もともと「はらわたがちぎれる」という意味があることがわかってきました。言い換えれば、主であるイエス・キリストは、息子を失いやめとなった母親を見て、はらわたがちぎれるようになるくらいの悲しみを覚えられたことになります。新聞の記事を

読み、「かわいそう」と感じるレベルとまったく違います。

イエスはまるで放蕩息子のたとえ話に出て来る父親のようなのです。母親を見て、もういてもたってもいられなくなる。ほかの人から何を言われようが、自分がどうなろうが、そんなことよりもこの母親のことをなんとかしなければと、まるで前後の見境を失ったかのように、イエスは突き動かされます。

(2) 「泣かなくてもよい」

そしてこう言うのです。「泣かなくてもよい。」もちろん、みっともないからめせめするな、という意味ではありません。

このことばには、いろいろな意味が込められています。母親が息子を失って悲しみに暮れているのをご覧になることは、主にとっては耐えられないほどつらい出来事なのです。あえて言い直せばこんな意味が込められています。「あなたが涙を流して泣いているのを見るのは、わたしにもつらい。だから、どうか泣かないで欲しい。」

もちろん、そこでとどまるなら単なる自己中心に過ぎません。イエスの思いはもっと先にあります。それがもうひとつの意味。「あなたがもう泣かなくてもよいように、わたしはひとつのことをします。あなたが失ってしまったあなたの大切な息子を、わたしは死から取り戻します。そしてあなたに返します。だからもう泣く必要はありません。」

この後起きたことについては、聖書に書かれてあるとおりです。私たちはこれを読み、神である主が奇跡を起こされた。主はすばらしい。そのような単純な話して終わらせてはなりません。

5 罪を引き受ける

主は、死んだ若者を死から取り戻されました。そのときどんなことがイエスの中で起きたのかを最後に考えたいと思うのです。主は、なにも感じることなく死んだ者をよみがえらせたのでしょうか。そんなはずはありません。私たちが死ぬべき存在になったのは、アダムが罪を犯したからであると、パウロは語っています。ですから、私たちが死に至らせる罪が赦されない限り、よみがえりということは絶対に起きることはありません。

そうしますと、若者がよみがえったということは、イエスはこの若者の罪を赦したことになります。罪を赦されるとき、この方は何も感じないのでしょうか。そんなことはありません。赦した罪はどこかに消えてなくなるのですか。この世界はエネルギー保存の法則が働いていると学校で学んだ記憶があります。それと同じように、罪にも保存の法則があります。赦された罪が消えてなくなることはありません。水に流して終わりではないのです。

では、その罪はどうなるのか。イエスが引き取られたのです。イエスがこの若者の罪、そして母親の罪もご自分の側に引き寄せ、背負われたのです。聖い方が罪を背負われます。十字架でさばかれなければならない罪です。痛みを覚えます。悲しみを感じます。

でも、主である方は思われます。自分はどうなってもかまわない。この母親がひとり息子を亡くし、涙に悲しんでいるのを見ていることは、とてもつらい。なんとかしなければ。

神は冷たい方でしょうか。神は私たちが苦しんでいるのをただ上から眺めている方なのでしょうか。決してそのような方ではありません。むしろ、私たちの悲しみをともに悲

しんでくださる方です。ちょっと悲しむだけですぐに忘れ、どこかに行ってしまう方でもない。

私たちが抱え込んでいるこの悲しみをなんとかしなければと、いてもたってもいられないのです。ご自分のことなど忘れて、見境がなくなったかのようにされて、私たちを、私たちが失ってしまった愛する家族を死から取り戻そうとされるのです。それが私たちの主です。

主の御名をあがめたいと願います。